NPO法人　八木まちづくりネットワーク

講演：2013.03.10
マイグレーション研究会 講演会記録
場所：八木札の辻交流館
【130620版】

八木札の辻交流館

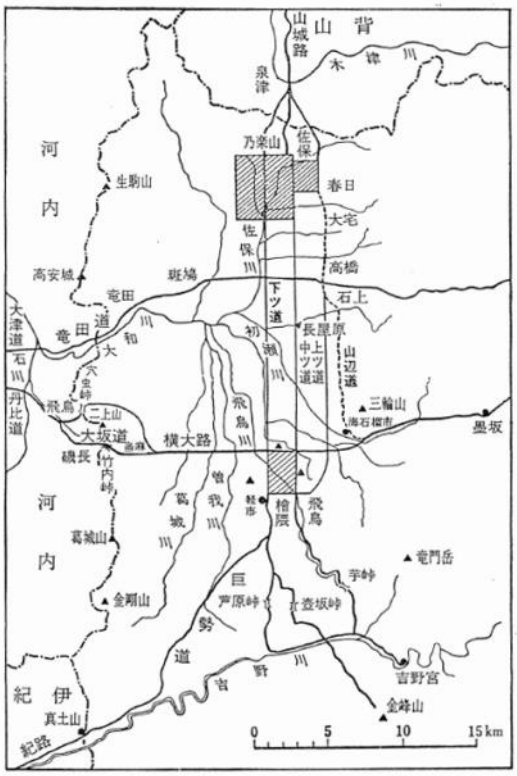
八木の歴史とその魅力 ―近世を中心に―

講師：谷山正道（天理大学　文学部教授）

古代から交通の要衝であつた八木

大和といえば古代の話が多いなか、今日は私が主に研究対象としている江戸時代を中心に話します。

現在でも八木は大変交通の便のよいところです。近鉄大阪線・橿原線が走り、JRの畝傍駅があり、またバス交通も便利なところです。こうした交通の要衝であることは、八木の場合、古代にさかのぼってもそうでありました。



大和における古道と宮都（岸俊男『宮都と木簡』より）

八木は、古代の幹線道路であった「横大路」と「下ツ道」が交差する場所でした。上図は、古代大和の主要な道路と藤原京・平城京の位置を示

目次

古代から交通の要衝八木 .1
集落の形成と町場化.....2
「大和めぐり」・「西国巡礼」・「伊勢参り」の盛行 3
大和の主要な街道 4
町場であつた「村」.....5
軒を連ねた商家.....7
「お蔭参り」と施行.....8
大和の集会場所木原屋 ...9
幕末大和の碩儒　谷三山
全聾の碩学.....10
谷家史料の研究 11
おわりに 12

谷山正道先生の紹介

天理大学文学部教授

専門分野：日本近世史

研究課題：幕政改革の研究
近世近代移行期民衆運動史
大和地域史

経歴：

1979年に広島大学大学院文学研究科博士課程後期（国史学専攻）を中退後、広島大学附属中・高等学校教諭、広島大学文学部助手・講師・助教授を経て、1991年に天理大学に着任。1996年から現職。

したものです（岸俊男説による）。最近では、藤原京の範囲がもっと広かったとする「大藤原京説」も提示されています。古代の都城である藤原京・平城京の建設が、南北東西を走る道を活用する形で行われたといえます。岸説では、横大路が藤原京の北の京極、下ツ道が平城京の朱雀大路に通じる道となっていますが、その交差点が八木でした。

現在の道巾は、江戸時代のもので、古代の横大路と下ツ道は、これよりずっと広く、30m～40m巾のまさしく大路でした。

集落の形成と町場化

八木は、古代から交通の要衝であったこともあり、中世には集落が形成され（興福寺一乗院門跡領、春日若宮供米料所となり、「八木庄」と呼ばれました）、さらに商業活動が盛んに行われるようになりました。中世後期に、八木では「市」が開催され、多くの取引がなされるようになっていました。札の辻交流館から北側の道幅の広がったところが「市」開設の場所でした。また「座」（商工業者らの特権的集団）が結成され、油の材料を買い付けて奈良に販売する「荏胡麻【えごま】の仲買座」や物資の輸送に関わる「駄賃座」などが存在していました。中世後期における八木は、奈良盆地南部の商業の中心地になっていたのです。

また中世後期には環濠（堀）がめぐらされていたことが確認され、現在もその名残をとどめています。室町時代の八木の様子を後年に描いたとされる絵図からは、現在の札の辻を中心に環濠に囲まれた集落であったことがわかります。

旅の盛行と大和

そうした中世の時期を経て、この八木の地は、織田信長・豊臣秀吉の時代から江戸時代にかけてさらににぎわいを見せるようになっていきました。

以下、「旅の盛行と大和」についてまずお話しし、続いて近世の八木の様子と注目される点について述べようと思います。

近世社会と旅

近世は中世とは違って、天下統一が行われ、全国を支配する統一政権が成立した時代です。それまでは、街道のあちこちに在地の領主や寺社によって関所が設けられ、通行する人は関所を通るたびにお金を支払わなければならず、非常に不便でありました。そうした関所が撤廃され、さらに交通路や通行のための施設の整備が、江戸時代

にかけて進みました。また大坂夏の陣での豊臣氏の滅亡に伴って、戦のない平和な時代が到来しました。そのもとで、生産力が高まり、やがて生活にゆとりもでてくるようになりました。そうなると、人々が旅に出ることが盛んになっていきます。

17世紀の後半には、そうした人々の旅心をくすぐる出版が盛んになります。名所案内図や絵図が出版され、人々はそれらを今でいうガイドブックにして、盛んに旅に出るようになったのです（大和では、名所案内記の版行が、1660年代の後半から始まったことが知られます。また、大坂から訪れる旅人の視線を意識したと思われる東が上になった奈良や大和の絵図も、多く作成されるようになりました）。

当時の人々が遠方に旅に出るに際して必要とされたものが、往来手形（通行手形）でした。私たちは、当時の人々が旅に出るのは難しかったのではないか、自由に旅ができなかったのではと思いがちですが、実際はそうでなく、思いのほか自由だったのです。なぜなら、通行手形は代官が発行したのではなく、村の庄屋や町の年寄、または旦那寺の住職が発行していたからです。たとえば、参勤交代で江戸にいる領主のもとへ直訴に行く場合など、箱根などの関所を通らなくてはいけませんが、手形は村の庄屋に発行してもらうことができたのです。このように旅に出やすい制度になっていたことを指摘しておきたいと思います。

「大和めぐり」・「西国巡礼」・「伊勢参り」の盛行

1600年代の半ばすぎには、旅に出る人々が増えるようになりましたが、大和はそうした旅人が多く来訪した場所でした。商売以外では、大和めぐりや西国巡礼の人々、また伊勢参りの途中に立ち寄る人々が、大和を訪れる人々の中心でした。『西国三十三所名所図会』の「八木札街」の記述からもこのことがうかがえます。大和は悠久の歴史の舞台であり、数多くの由緒ある寺社や名所旧跡が存在し、また著名な年中行事が催されるところでした。そうした大和は旅のスポットとなり、今でいうガイドさん、即ち、大和の名所旧跡を案内することを生業とする人も出てくるようになりました。

西国三十三所巡りでは、壺阪寺・岡寺・長谷寺・南円堂が大和の札所となっており、その途中に八木に寄ることもあったようです。

また江戸時代に入って、伊勢参りも盛んになりました。伊勢神宮の内宮と外宮は、江戸時代には庶民とのつながりの深いところでした。内宮には太陽神である天照大神【あまてらすおおみかみ】、外宮には農業神である豊受大神【とようけのおおかみ】が祀られています。あたかもお寺の大本山のようなところだったので、当時の人々は「一生に

八木札の辻交流館

橿原市指定文化財「東の平田家」（旧旅籠）は、平成24年7月14日より、八木札の辻交流館として開館。建物の見学は無料で、2階を貸室として利用できます。

1階土間部分には休憩できるようベンチとお茶の用意もあります。

「八木のまちを散策する拠点としてぜひご利用ください」とのことです。

所在地：奈良県橿原市北八木町2丁目1番1号

開館時間など、詳しくは、橿原市教育委員会文化財課（0744-29-5902）まで。

東の平田家　鬼瓦のへら書き

東の平田家（旧旅籠）

橿原市指定文化財

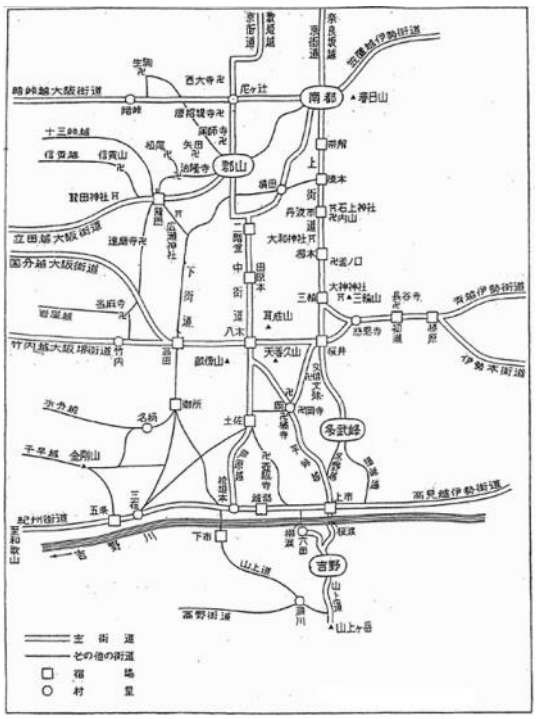
今のところ棟札などの直接的な根拠は確認できていませんが、古文書、構造手法、鬼瓦の箆書（へらがき）などから、18世紀後半～19世紀前半を降らないと考えられます。

東の平田家の主屋は「中街道」と「初瀬街道」の交差する東北角に建ち、東南側の「初瀬街道」に面して角屋が付属し、その北側に坪庭があります。（橿原市生涯学習部文化財課HPより抜粋など）

伊勢道中記　大坂浪花講　御定宿附

一度は伊勢に参りたい」という思いを強く持っていました。経済的にゆとりのある人々は家族連れで伊勢参りを行いましたが、通常は村や町のなかで「伊勢講」という組織をつくり、毎年その講の代表が順番に参る「代参」が行われていました。

大和の主要な街道



江戸時代の街道地図（『奈良県地誌』より）

江戸時代の大和の主要な街道を示した図には、東西に走る街道として、北から暗越越え大坂街道、竜田越え大坂街道、国分越え大坂街道、そして八木を通る竹内越え大坂街道（初瀬街道）、さらに南の紀州街道などが記されています。また南北方向の街道には、東から上街道、八木を通る中街道、下街道などがありました。このように縦横に網の目のように走る街道を通りながら、多くの旅人が大和を訪れ巡るようになったのです。

大和へ影響

旅が盛んになるにつれて、大和では多くの人々が訪れるお寺や神社の門前町がにぎわいを見せるようになりました。また宿場町が発達し、街道に沿う集落も発達していきました。17世紀の後半から、庶民の旅が盛んになるにつれて、現在の観光都市奈良・観光地大和の礎が形成されていったと言うことができるでしょう。

これらのことを踏まえて、以下、近世の八木について話します。

町場であつた「村」

近世の八木は、実態は町場化していたのですが、行政的には村として把握されていました。また、ひとつの村だったのではなく、初瀬街道を境に、南側の高市郡（南）八木村、北側の十市郡北八木村とに区分されていました。

さてここで質問です。当時の八木の住民の「身分」は何だったのでしょうか。

「身分」には、「武士・百姓・町人」という区別がありました。答えは「百姓」です。札の辻の「きわらや」のように旅籠を営んでいた住民でさえ、農業をしていなくても「村」の住民の「身分」は「百姓」だったということです。ちなみに、いわゆる「士農工商」の区分は「職分」によるもので、「身分」ではありません。

北八木村（文禄検地高111石余、のち139石余）は、幕府領から郡山藩領→幕府領→高取藩領へと変遷し、天明7年（1787）の戸数は141軒（家持54・借家87）でした。一方、高取藩の領地であった（南）八木村（文禄検地高465石余）の戸数は、近世後期に、年不詳ながら268軒（家持94・借家174）、人口は940人にのぼっていたことがわかっています。

「浪花講」から、中程に「八木」「木原や嘉右衛門」とある

宿場の発達とにぎわい

八木は中世後期にもにぎわっていましたが、江戸時代に入るとさらにぎわいをみせるようになりました。当地は、東西の幹線道路であった初瀬街道（大坂往還、伊勢往還）と南北の幹線道路であった中街道（吉野往還）が交差する場所でした。

幕末に近い時期に刊行された『西国三十三所名所図会』の「八木札街」の図をご覧下さい。

現在の札の辻交流館にあたる東の平田家が真ん中に描かれてい

西国三十三所名所図会

暁鐘成の編集、松川半山・浦川公佐の画で嘉永6年（1853）3月に刊行された現在で言うところの旅行案内書。

伊勢・紀伊・和泉・河内・大和の霊場巡りの道中名所が多数掲載されている。

当時の風俗を伝える写実的な図や鳥瞰図が描かれているほか、伝承や遺跡・出土物の類も収録されている。

東の平田家2階から見る八木札の辻
右は、西の平田家

ます。なぜ「札の辻」と呼ぶのかというと、街道がクロスしたところに高札場があったからです。高札とは、人々が特に守るべき事項を示した掲示板で、キリシタンの密告や、親孝行の奨励、火付けの禁止を命じた高札が代表的なものであり、江戸後期には百姓一揆の密告を促す高札も掲げられるようになりました。こうした高札が支配を行うに際して活用されたということから、江戸時代の民衆の識字率がかなり高かったことがうかがえます。

西国三十三所名所図会より

八木の町の札の辻ハ、東ハ桜井より泊瀬にいたる街道

南ハ岡寺・高取・吉野等への道すじ

西ハ高田より竹内・当麻への往還

北ハ田原本より奈良・郡山への通路にして

四方往返の十字街なれバ、晴雨暑寒をいとわず

平生に旅人間断なく至って賑わし

毎朝札場の傍において魚市あり

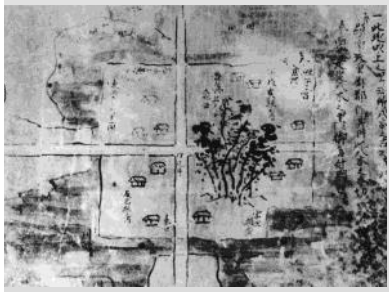
此辺いづれも旅籠屋にて　家作ひろく端麗なれバ

伊勢参宮の陽気連、駕【かご】をつれたる大和巡り

両掛持たせし西国順礼なんど

日の高きを言ずして　ここに宿る

所謂近隣においての繁花なり



八木と環濠を表す絵図

八木に残る環濠の跡

これは「八木札街」の図の上部に記された文章ですが、当時の八木の様子を端的に言い表しています。

江戸時代に、多くの人が八木にやってきました。有名な松尾芭蕉や本居宣長、吉田松陰らも当地を訪れています。八木についての紀行文の記事を抜き書きしました。

貝原益軒は、『和州巡覧記』のなかで、八木は「交通の要衝で宿駅がある」と記しており、天保年間に当地を訪れた安田相郎は、「町柄が甚だよろしく、毎月市が立つ場」だと述べています。また幕末に天誅組に参加した伴林光平は、「旅籠の女性が呼び込み合戦をしている」と記しています。吉田松陰も谷三山を訪れた際の記事を書き残しています。

中街道に沿う町並み

東の平田家　2階の格子

「お蔭参り」の様子

軒を連ねた商家

八木は、主要な東西南北の街道がクロスする町場で、宿場としてにぎわいをみせていましたが、旅籠屋のみならず、さまざまの商家が東西南北の街道に添って軒を連ねていました。江戸後期の調査書によると、旅籠屋は北八木村に五軒、（南）八木村には四軒あり、当時八木には九軒もの旅籠屋があったことがわかります。また、造酒屋、造醤油屋、絞油屋など、周辺から材料を購入し加工して販売する、資本力を要する稼業を営む者も存在していました。このほか米や魚、青物、菓子、日常の雑貨類を売買する商人、また綿の加工に従事する職人など、多くの商人・職人がこの八木で営業していたことが知られます。

八木せんたい場
移される前のお蔭燈籠

お蔭燈籠

太神宮
明和八辛卯年九月
参宮摂待連中
竿のみ四角柱でその他はは六角である。元は八木せんたい場にあったが移されてしまっている。
参考文献
『奈良県の太神宮常夜燈』
（荒井留五郎編著　1997）

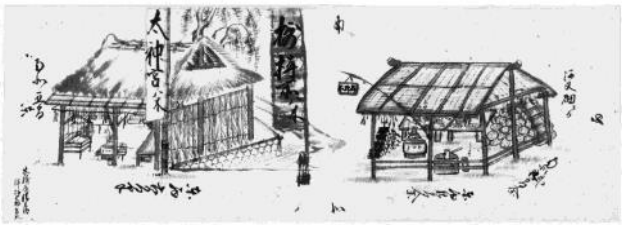
「お蔭参り」と施行

八木には、「お蔭参り」のときに当地で行った、伊勢に向かう人々に対する施行に関する大変興味深い記録が残っています。

当時の人々は「一生に一度は伊勢に参りたい」という思いを強くもっていましたが、伊勢講に入れない経済的に恵まれなかった人々や、伊勢講に入っていても家の当主以外の女性や子供は通常伊勢に参宮できないという現実がありました。そうした人々にとって宿願をはたす千載一遇のチャンスが「お蔭参り」だったのです。

なかでも、宝永2年（1705）、明和8年（1772）、文政13年（1830）の「お蔭参り」は大規模なものでした。「お蔭参り」は、当初「抜け参り」と呼ばれていました。仕事していた人が突然抜けていなくなり、伊勢参りに出かけたからです。途中からは、「お蔭参り」という表現が定着するようになりましたが、そこには、伊勢へ参宮できるのは神符が降るなどの神異や珍しい事が起きた「お蔭」だ、また、街道筋での施しの「お蔭」だという意味がこめられていました。

八木は、竹内峠を経て伊勢に向かう街道に沿った場所にあり、「お蔭参り」の際には多くの人が通りました。その折の施行の様子がうかがえる貴重な記録が恵比須神社に残っています。札の辻交流館の西方、初瀬街道沿いの左側にせんたい場がありました（なお現在、困ったことにその場所にあったお蔭燈籠は他所に移されてしまっています）。



八木せんたい場の図（橿原市北八木町恵比須神社所蔵）

また、明和8年（1771）と文政13年（1830）の「お蔭参り」の際に、八木西口のせんたい場へ、どんなものがどこから提供されたのかを示す記録も残っています。麦、米、割木などが提供されていますが、それらは八木の住民からだけではなく、明日香や大坂の人からも寄進されたことがわかります。

さらに、文政13年（1830）の「お蔭参り」の際に、施行宿を行った「とり源」（「鳥屋源介」）の記録も残っています。三分冊からなるこの記録には、いつ、どこからきた人を何人泊めたかのかが記されています。なんと多い日には130人もの人を泊めていることがわかります。食事は茶粥ぐらいのものだったようですが、泊めた人の多さに驚きます。和泉や紀伊、河内から来た人が多かったですが、宿泊者のなかには伊勢より東

の人も含まれていました。「お蔭参り」の間には通行手形がなくても関所を通してもらえたため、伊勢参りのついでに大和に来たのではないかと思われます。

山之坊の吉川家の記録にも、多くの人を泊めた「鳥屋源介」のことが記されています。彼は米相場で儲けたため、施行宿を行って、都合1万人もの人を泊めたところ、神慮に叶ったのか、さらに100貫目もの金を儲けたとあります（しかし、その後、天保の大凶作のときに米を買い占めたために、奈良奉行所の役人よって捕らえられるに至っています）。

また上品寺の上田家の記録には、八木西口で施行駕篭が毎日70ほど出されたことが記されています。どうしてこのように、人々は「お蔭参り」の際に競って施行を行ったのでしょうか。これは伊勢に行かなくても、施行することによりいいことがあると信じられていたからです。そんな中で、柳本藩は文政13年（1830）の「お蔭参り」の時に施行を行わず、続いておこった「お蔭踊り」も厳しく差し止めようとしましたが、11月に陣屋が焼失してしまうことになり、人々から「それみたことか」との声があがったことが知られます。

八木せんたい場の様子
薪やかまど、臼、杵などが描かれている

大和の惣代らの集会場所となっていた木原屋

近世の八木に関して、もうひとつ興味深いことがあります。「札の辻」の旅籠屋木原屋嘉右衛門方（「八木辻嘉」）が、大和の各所領の惣代らによる「国中参会」や幕府領の惣代らによる「御料参会」の開催場所になっていたことです。近世の大和国は、100を越える領主によって分割支配されていましたが、江戸中期以降になると、領主支配の枠を越えて、時には1000か村に及ぶような広汎な村々が連合し、奉行所へ訴え出る「国訴」と呼ばれる運動が展開されるようになりました。そうした運動の際に、交通の要衝であった当地の木原屋が、惣代らの集合場所として利用されるようになったのです。一例として、天保の剣先船国訴のケースについて紹介しておきましょう。

1980年代の札の辻（東から見る）

当時、大和の百姓が使う肥料の多くは大坂から取り寄せていました。それらは大和川を往来していた剣先船と呼ばれる船で河内と大和の国境に位置する亀の瀬まで運ばれていました。しかし、亀の瀬の手前で川底が荒れている場所があり、大坂の船主はさらに下流で荷を降ろす事などを要求してきました。これを「国難」として受けとめた大和の幕府領の惣代は他の所領の惣代に呼びかけて、何度も八木で対策会議を開いたことが知られます（その後無事、大和側の意向が通る形で落着しました）。このように、八木は大和の民衆運動においても重要な場所だったのです。

改修前の東の平田家

参考文献

堀井義治著 伝記谷三山

谷三山百年祭記念事業推進会 1966

今も残る谷三山の生家

幕末大和の碩儒　谷三山

最後に、(南)八木のすばらしい学者「谷三山」について紹介しようと思います。

以前、谷三山に関して話す機会を与えられましたが、その後、谷家の史料を調査することができ、現在も研究を進めているところです。

全聾の碩学

谷三山は幕末の大和随一の儒学者といえます。享和2年(1802)に生まれましたが、身体が不自由で、10代半ばで耳が全く聞こえなくなりました。普通の仕事ができなかったのですが、幸いなことに三男であり、また家が米穀の商いや絞油業を営み豊かであったため、学問三昧に暮らすことができました。

谷三山は大坂あたりから取り寄せた様々の書籍、例えば中国の歴史書・儒学書や日本の歴史に関する書物、外国の事情にかかわる書物までほとんど独学で読破したようです。彼と筆談した京都の儒者猪飼敬所が、「清儒の博治【はくこう】にも勝るべし、老拙の及ばざるところ」とびっくりするほどの存在であったようです。

高取藩への出仕

彼は、興譲館という塾を開き、多くの門弟を指導するようになりました。吉村抑亭(十市郡田原本村)、上田淇亭【きてい】(山辺郡備前村)、前部重厚(高市郡小房村)、山田作治郎(高市郡石川村)、森竹亭(高市郡田井庄村)、岡本通理【つうり】(葛下群高田村)、久保耕庵・良平(宇陀郡松山町)らが主要な門人で、原田亀太郎のように遠く備中からやってきた弟子もいたほどです。また、天保15年(1844)からは高取藩にも出仕するようになり、藩士に講義を行いました。

吉田松陰の来訪

吉田松陰が谷三山を訪れ、教えを請うたこともありました。嘉永6年(1853)に各地を回っていた松陰は、大和五條の儒学者森田節斎を訪ねたあと、「孫子」に精通していた谷三山の弟子森鉄之助を訪れ、そして八木にやってきました。この後松陰は海外渡航を企て失敗しましたが、海外事情によく通じていた谷三山の言説が松陰の行動に影響を与えた可能性が高いのではないかと思います。

海外事情によく通じていた三山

谷三山は、尊皇攘夷論をとなえましたが、海外事情をよく把握した

上で意見を述べていました。彼は、攘夷の必要性をいいながら、アメリカがなぜ独立国家を形成し、強国になることができたかということについて勉強していました。また、アメリカの公教育が充実していることも知っていましたので、これにならってわが国も軍備の強化をはかるとともに、学校制度を充実させることが大切だと述べています。

交流のあった高取藩の築山愛静宛の、三山の手紙のなかから、これに関する文面を以下に紹介します。

「近来英吉利、米利堅の強盛なるも、亦ゆえあることにぞ。いづれも処々に学校を設け、国中の俊秀を其中に教育して、治彊の術を講磨す。就中米利堅の学尤盛にして、其一部生徒五十余万人に至るものありと承る。」

「これそも何の故ぞや、ただ船堅く礮利【ほうり】なるばかりにてはあるべからず、必其説あらん。かの稊稗【ていはい】の秋あるを見て、わが稲粱の未だ熟せざるを思ひ、大に学校を興し、盛んに生徒を聚め、厳に学制を立て、教育の方を尽し、務て浮華を斥けて実効を収めん。」

「洋夷勢日に猖獗【しょうけつ】、近年互市を許されし三国、みな世界に一二を争ふ強虜なれば、国家一日も油断はならず、武備はいふに及ばず、文治を隆して国本を固くすること尤【もっとも】方今の急務にて、上たる人の日夜に心を用ふべきところ也。」

このように、学校教育を充実させ、富国強兵を図る必要を強調しています。谷三山は、普段はほとんど外に出ず、門人に教える時間以外は、一室に籠って書物を読むという毎日をすごしていましたが、狭い空間から世界の動きを見つめていた大学者であったといえるのではないでしょうか。

谷家史料の研究

過日、谷家の史料を調査しました際に、今まで知られていなかった興譲館の蔵書目録や三山宛の未紹介の手紙が見つかりました。

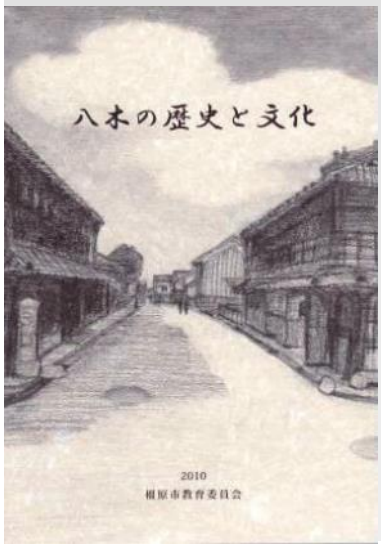
後者のなかには、一通だけですが、石河確太郎（正竜）からの手紙もありました。高市郡石川村の出身で谷三山の門人の一人であった山田作治郎に学んだ後、江戸や長崎に出て、蘭学を学んだ秀才でした。薩摩藩の島津斉彬【しまずなりあきら】の下、藩士に登用され、活躍した人です。彼は、幕末の薩摩藩の経済面でのキーマンだったと考えています。彼は、薩摩の国力を高めるために物産交易を進めることを上申し、薩摩の商品を大和で売り、そこで買い付けた綿や木綿を東北の酒田で売り、そこで米を買い付けて薩摩へ持ち帰るという三角交易を行うことを提言しています。また、南北戦争の状況を踏まえ、今

谷三山座像（橿原市立晩成小学校）

八木の歴史と文化

Ⅰ.はじめに
Ⅱ.八木町の歴史　平井良朋
Ⅲ.八木町・（旧旅籠）平田家について　林清三郎
Ⅳ.八木の愛宕祭りと立山　鹿谷勲
Ⅴ.八木の文化財

編集・発行
奈良県橿原市教育委員会　2010



日本の綿を買い集めてイギリスへ売ったら儲かる、今が売り時だと進言し、実際に長崎のグラバーを通してこれを行っています。さらに、イギリスの紡績機械を導入することを進言し、薩摩の磯や堺に紡績工場を開設することに力を尽くしました。

そうした石河と谷三山がつながっていたということが、今回の史料調査を通して明らかになったことはとても嬉しいことです。

谷三山と私の姓は似ているのですが、私には「三」がないのです。その小さな差がこれほどの学者としてのレベルの差になるのかと引け目を感じながら、少しでも三山先生に近づきたいと思っています。こうした大学者が出たのが、当地八木でした。交通の要衝であり、情報が入って来易い場所だったこともこれに影響していると思われます。

おわりに

橿原市の古い町並みとしては今井町が有名で、今まで今井のほうに注目が集まりがちでしたが、近年になって八木が次第に注目を浴びてきています。NPO法人「八木まちづくりネットワーク」の活動の成果、関係の方々のご尽力の賜といえるのではないでしょうか。

この東の平田家が「八木札の辻交流館」として2012年7月にオープンし、当地のシンボルができたことで、今後も歴史的な文化遺産を活かしたまちづくりや、八木の魅力の発信が進んでいくことと思います。

奈良県では、文化財行政に偏りがあり、古代に重点が置かれ、都が奈良を離れて以降の文書などは軽視されがちです。しかし、文書は、新しい時代のものも含めて、かけがえのない文化遺産であり、それぞれの時代の有様を解き明かす上で不可欠な研究材料でもあります。現在私は、「八木まちづくりネットワーク」の方々とともに、八木に残っている文書の調査と保存に着手していますが、それらの文書を分析することで、今まで見えていなかった八木の姿を浮かび上がらせることができると思っています。

マイグレーション研究会

「海外への移民、人の移動」を学際的に研究する会で、歴史学、地理学、社会学、文化人類学、文学、教育学等々の研究者が会員です。

http://migration.cocolog-nifty.com/

この冊子は、2013年3月10日マイグレーション研究会の例会の中で行われた講演会をまとめ、同会のご協力をいただき、また、講演後、谷山先生の監修を経て作成いたしました。ご厚情に感謝申し上げます。

NPO法人

八木まちづくりネットワーク

~~〒634-0005 奈良県橿原市北八木町2丁目1番5号~~

※無断転載はご遠慮下さい。